

平成26年度全国及び岡山県学力・学習状況調査 結果と今後の取組について【学校版】

津山市立北陵中学校

教育目標(めざす児童生徒像)

豊かな人間性を培い、主体的、創造的に自己実現をめざす、心身ともにたくましい生徒を育てる。

今年度の指導の重点

- (1) 確かな学力の定着と向上を図る。(基礎基本の定着と活用型の授業改善)
 - (2) 豊かな心を育てる。(絆づくり 一人ひとりが存在感と達成感の持てる集団づくり 居場所づくり 安心して学べる環境「時を守り・場をきれいにし・礼をつくす」)
 - (3) 将来に夢を持ち、自ら考え行動し、進路を切り拓く力を育てる。
 - (4) 小学校や地域との連携を進め、道徳的な実践力を育てる。
- 学校は「一人前の大人になるための学びの場」である。自分の良さや個性に気づき、それを主体的に伸ばそうとする心や態度は、この中学時代に基礎が培われる。本校教育目標・指導の重点達成に向け、教職員が協同して教育活動を展開し、信頼される学校づくりに努めたい。

調査結果について(調査結果において明らかになったこと)

【学力状況調査の結果】

全国

国語A・数学Aは岡山県平均とほぼ同程度であるが、国語B・数学Bは県平均より低く、全国平均との開きも大きい。調査全般にわたって、無回答率が高く、平均正答率を下げる要因となっている。無回答率が高い背景として、学力下位層の割合が高くなっていることが推測される。

国語Aでは、「学習指導要領の領域等」の「話すこと・聞くことが低い。他の項目は、ほぼ県平均と同程度である。

国語Bでは、「学習指導要領の領域等」の「書くことは県平均を上回っている。」「問題形式」でも「記述式」では、県平均を上回っており、言語活動(書く活動)を重視した授業改善の成果が見られる。

数学A・数学Bにおいて、連立方程式、確率、連立方程式と1次関数の関連問題、関数の応用問題で、特にグラフや文章の数量関係を読み取り考察する力に課題があることがわかる。一方、図形の性質を利用した証明は、比較的強い。また、昨年課題であった数と式の問題は取組の成果で改善されている。

粘り強く問題に取り組む力に課題があり、自信のない問題には無回答という傾向がある。また、短時間に問題を解くことになれていない様子が見受けられる。

県

国語、社会、数学、理科ともに県平均よりも高い。特に国語、社会、数学は平均正答率が県平均より高い。

全教科ともに活用の平均正答率の方が、県平均より高い。

各教科ともに、「観点」の「知識・理解」が他の観点と比較して、やや低い傾向があり、県平均と同程度となっている。

【学習状況調査の結果】

読書に取り組む生徒は県平均に比べかなり高い。

地域や社会で起こっている問題や出来事に関心があると答えた肯定的回答は高く、地域の行事に参加している生徒はかなり多い。

学校に行くのは楽しいと答えた割合は高く、学年が上がるにつれて、あいさつもよくできるようになっている。

授業以外の平日、家庭学習に取り組む時間が、3時間以上、あるいは2時間以上3時間未満と回答した割合が低く、家庭学習が定着している生徒とそうでない生徒がはっきりしている。家で、宿題をする生徒の割合は、県と同程度であるが、計画的に家庭学習をする生徒の割合が、県平均より低い。休日は平日よりも学習時間がより少ない。

平日に平日メール・インターネット、テレビやゲームに費やす時間が長く、学習時間の妨げとなっている。

「友達の話最後まで聞くことができる」という項目の肯定的回答の割合が、県平均より低いことや「授業で自分の考えを他の人に説明したり文章に書いたりすることが難しいと感じている」割合が、県平均より高い。また、「国語の授業で意見などを発表するときうまく伝えるように話の組み立てを工夫しているか」という割合も県平均から低いことなどから、聞く、話すということに何らかの苦手意識や困難を抱えている生徒が多い。

成果と課題

【成果と課題】

国語は、書くこと・記述式の項目で県平均を上回っており、言語活動(書く活動)を重視した授業改善の成果が見られる。

数学は、図形の性質を利用した証明は、比較的強い。また、昨年課題であった数と式の問題は授業や家庭学習課題の提示など取組の成果で改善されている。

国語・数学ともに無回答率の高さが課題である。自信のない問題には無回答とする傾向があり、粘り強く課題を追求する習慣が身につけていない。また、限られた時間の中で、課題を見極め解決していく経験が不足しており、この点でも無回答率が高まる結果となっている。

課題に対応した改善方法

【課題に対応した改善方法】

校内研究体制で、思考力・判断力・表現力を高める「活用型」の授業改善を進めている。今年度もすべての教師が授業研究を重ね、一回以上指導案を作成し、授業公開を行うことで授業改善に努める。

昨年、各教科の授業の中で言語活動(書く活動)を必ず取り入れることを改善方法として共通理解した。成果も現れつつあるが、一方で、話すこと・聞くことの問題も見えている。各教科や学級経営で話すこと(発表)の工夫を行い、発表の機会を増やしていく。

あいさつ運動など引き続き、生徒会活動等生徒の自主的な活動を中心に取り組みを続ける。また、道徳や学活などであいさつに関する題材も取り入れ、あいさつの習慣や意識を高める。

家庭学習の内容や量について職員間で実態調査を行った。今後、家庭学習の効果的な提示の仕方を考え、ドリル型(基礎基本)および探求型(活用型)の家庭学習を各教科でバランスよく与える。さらに、自主的、計画的に家庭学習が進められるよう、各学年や学級で工夫した取り組みを行う。

取組の検証方法及び検証時期

2年生で、全国・県の学力・学習状況調査にあわせて、標準学力調査を実施(4月)。定期考査で活用した類似問題の正答率を分析し、課題となった力の伸びの分析。学校評価アンケートの実施(3学期)。職員を対象とした生徒の学力、授業に関するアンケートの実施(年度末)。上記の結果から改善の見直しを図る。

達成目標(数値目標)

どの教科も、平均正答率が県平均を上回る。
家庭学習時間が2時間以上の生徒の率を現状の約2倍の60%に増やす。
教科の授業が、「わかりやすい」率70%、「好きである」率60%以上を目指す。
定期考査での類似問題の正答率60%以上。